

博士学位論文要約

論文題目：

H・ソルドのシオニズム観と「ハダッサ」における展開
—アメリカ・ユダヤ人女性シオニストとしての「ユダヤ的伝統」の再解釈—

氏 名： 石黒（大岩根）安里

1. 序章

本稿の目的は、ヘンリエッタ・ソルド (Henrietta Szold, 1860-1945) のシオニズム観の独自性を明らかにすることにある。別の言い方をすると、ヘンリエッタ・ソルドを通して、シオニズムの一側面を理解することを目的としている。ソルドは、1912年にニューヨークでユダヤ人女性のシオニスト団体、「ハダッサ」—アメリカ・女性シオニスト機構 (Hadassah—the Women's Zionist Organization of America、以下、ハダッサ)¹を設立したことで知られる人物である。

本稿では、ルイス・ブランダイス (Louis D. Brandeis, 1856-1941) のシオニズム理念とソルドのシオニズム観の比較、またユダ・マグネス (Judah L. Magnes, 1877-1948) のユダヤ教理解とソルドのユダヤ教観の比較を通して、ソルドのシオニズム観の独自性について考察する。比較の対象として、ブランダイスとマグネスを取り上げた理由は次の通りである。ブランダイスは、イスラエル建国以前のアメリカ・シオニズム界を代表する人物の一人であったため、ブランダイスのシオニズム観とソルドのシオニズム観を比較することは妥当であると考えられるためである。一方、マグネスを取り上げる理由としては、彼がソルドの生涯の友人であり、とりわけソルドがパレスチナへ渡ってからは、行動を共にすることが多かったことが理由の一つである。また、マグネスは改革派の流れを汲むラビであり、ヘブライ大学の初代学長としても知られる人物であり、マグネスのユダヤ教解釈とシオニズム理念の関係性を参照することは、ソルドのユダヤ教理解とシオニズムの関係性を考察するうえで役立つものと考えられるためである。

シオニズムを分析する研究は、しばしばイデオロギー上の論争に終始する傾向がある。この

¹ ハダッサは 2012 年に設立 100 周年を迎えた団体である。博愛主義的な理念に基づいた活動が称えられ、2005 年にはハダッサの一部門である、Hadassah Medical Organization (HMO) がノーベル平和賞の候補にノミネートされている。ハダッサの Web サイトによると、約 33 万人の会員が所属している。ハダッサの活動は主にアメリカとイスラエルにおいて展開される。イスラエルにおいては、エルサレムの病院、またアメリカにおいては、教育の担い手として認識されている。教育の担い手とは、すなわちアメリカ在住の若い世代を中心としたユダヤ人にユダヤ・アイデンティティを再確認する機会 (プログラム) を設けている。ハダッサの Web サイト。教育プログラムの一つに、イスラエルへの研修旅行が挙げられる。

(<http://www.hadassah.org/>) (2012/05/30 取得)

状況を顧みると、一人の人物（シオニスト）を通してシオニズムの歴史（思想の変遷をたどる歴史）を考察することは一定の意義があるものと思われる²。本稿は、今日まで続くイスラエル・パレスチナ問題を主題とするものではないが、ユダヤ人自身が主観的にシオニズムをどのように捉えていたのか——実際はユダヤ人内部にも相反する多種多様な見解が複雑に絡んでいる——を理解することは、大局的にイスラエル・パレスチナ紛争の問題点を考えるうえでも必要なものと思われる。

では、なぜヘンリエッタ・ソルドという人物を取り上げるのか。ソルドは「平和主義シオニスト」(pacifist-Zionists)³と呼ばれている。ソルド自身も自らを「シオニスト」であると公言していたためである。しかし、イスラエル建国後の今日ではソルドのような人物は、俗にいう「シオニスト」として認識されることは少ない。その理由は、先述の通り、ソルドが「平和主義シオニスト」という肩書きを付されていることから示されている。現在しばしば批判の対象とされる「シオニズム」あるいは「シオニスト」とは、ダヴィッド・ベングリオン (David Ben-Gurion, 1886-1973) などに見られる政治的に影響力を有した「シオニズム」・「シオニスト」を指している。一方、ソルドはベングリオンらとは異なり、イスラエル建国過程において、政治的あるいは軍事的な面での影響力がほとんどなかったことを理由に、ソルドのような人物はもはや批判の対象となる「シオニスト」ではない、という見解に依拠している⁴。

しかしソルドの人生を振り返ると、彼女は自分のことを「シオニスト」であると明言していた。このことは、複雑なシオニズム思想・運動を歴史的に紐解く場合、今日の観点だけでソルドを「シオニスト」ではないと位置づけることはできないことを意味する。当然のことながら、シオニズムの全貌を本稿において取り上げることは不可能であるが、ソルドという人物の視点から、イスラエル建国以前の「シオニズム」がどのように捉えられていたのかを検証することは、昨今のシオニズム議論を把握する前提としても必要なものになると考える。

² 人物を中心にシオニズムの多様性を考察する手法は、シュロモ・アヴィネリ (Shlomo Avineri) の著作が代表的である。アヴィネリは17名のシオニストを一章毎に取り上げ、近代シオニズム史を概観している。しかし、その中にソルドやブランダイス、マグネスなどは含まれていない。

³ 1920年代から30年代にかけて、イシューヴの人々の生活向上のために尽力したが、イシューヴ内での政治的覇権には関心を持たなかったシオニストを指す。メドッフによると、「平和主義シオニスト」の分類には、ソルドの他にユダ・マグネスが含まれている。なおイシューヴに関しては、本稿の注18を参照。Rafael Medoff, *Zionism and the Arabs: an American Jewish Dilemma, 1898-1948* (Praeger, 1997), p. 35.

⁴ 筆者は2011年8月25日18時から19時過ぎまでの一時間強にわたり、ハダッサの関連施設の代表を務めたこともあるローラ・ショー (Laura Schor) 氏にインタビューを行なう機会に恵まれた。ショー氏によると、今日のハダッサにおいては、ハダッサが「シオニスト団体」であることに変わりはないとしながらも、明らかにベングリオンとソルドのシオニズム活動は異なっていると位置づけ、今日のイスラエルがパレスチナ問題との関わりの中で人道的に糾弾される状況のなか、ソルドが目指したアラブ人との共存を目指すシオニズムこそが有効であると位置づけている。しかし、筆者のハダッサに対する見解はショー氏のものとは異なる。ショー氏の見解は今日のハダッサに孕んでいる政治的なプロパガンダの要素を（無意識的に？）含んでいるものと考えられるため、慎重な判断が求められる。むしろ、ここで指摘したい点は、ハダッサが二項対立的にベングリオンとソルドのシオニズムを理解していることである。

1.1 「シオニズム」という用語の定義

今日、シオニズムが主に問題とされるのは、イスラエル・パレスチナ紛争を論じる文脈であると言えるだろう。1947年、国連でのパレスチナ分割決議案を経て、翌年5月14日にベン・グリオンのイスラエル独立宣言を読み上げたことにより、米ソをはじめとした諸外国の承認を得たうえで、「ユダヤ人国家」としてのイスラエル国家が設立された。しかし、この出来事は同時に、アラブ人の目からすると「ナクバ（大破局）」を意味することになる。これ以降、パレスチナに居住していたアラブ人の多くは難民となり、「パレスチナ人」としての認識を有するようになる。今日に至るまでイスラエル国家の正当性をめぐる論争は当事者内外を問わずに続いている。

古今東西を問わず、「シオニズム」という用語に内包された意味は、語り手の文脈によって全く異なる意味で用いられている。「シオニズム」に込められた意味には、世俗化したユダヤ人のアイデンティティの保持に必要とされる「シオニズム」がある一方で、超正統派のユダヤ教徒からすると、「シオニズム」はユダヤ教に反するものとして位置付けられている。また、「シオニズム」を19世紀の植民地主義の運動の文脈で批判する者もいる。

このように「シオニズム」を語る担い手によって、一つの用語にさまざまな意味が内包されているわけであるが、そもそも「シオニズム」という用語が造られた当初から、用語自体の概念定義は一義的なものではなかった。この用語は1890年、ナタン・ビルンバウム（Nathan Birnbaum）によって作られた造語であるとされている⁵。ビルンバウムによると、「シオニズム」とはエレット・イスラエル⁶にユダヤ人が帰還することを目的とした運動を指す用語として用いられている。

さらにビルンバウムの見解によると、シオニズムには大別して二つの概念が含まれる。一つは、ヒバット・ツィオンに代表される、ユダヤ人の民族的な復興とエレット・イスラエルへの帰還を目的として掲げた運動であり、もう一つは、実際にエレット・イスラエルに帰還するというよりも政治的な活動を通してエレット・イスラエルに帰還するユダヤ人を支援することを目的とした運動である。つまり、エレット・イスラエルにユダヤ人が帰還することを目的とした運動でありながら、後者の説明によると、必ずしも、自らが帰還しなくとも、政治的な活動を通して、ユダヤ人がエレット・イスラエルに帰還することを支援するという文脈が含まれている。

このようにビルンバウムは「シオニズム」という用語はこの二つの性質を含んだものであると定義した。これに対し、1897年の第一回シオニスト会議では、ヒバット・ツィオンの運動は

⁵ *Encyclopaedia Judaica*, Second Edition (Keter Publishing House, 2007), vol. 21, pp. 539-542. 実際には、1886年あるいは1890、91年頃に印刷物の中で使われ始めているという見解がある。以下、参照。 *The Jewish Encyclopedia*, Isidore Singer, ed. (Funk and Wagnalls Company, 1925), vol. XII, p. 666.; ウォルター・ラカー（著）高坂誠（訳）『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』（第三書館、1987年）、851頁、原注、序の（1）。

⁶ エレット・イスラエルとは、ヘブライ語で「イスラエルの地」の意味。本論文では、「エレット・イスラエル」と「パレスチナ」はほぼ同義語として扱っている。イギリスによる委任統治時代に公的な地名として用いられた地域を指す用語として使用する。そのため「パレスチナ」という用語を、1948年のイスラエル建国後に使用される政治的意味合いを帯びた文脈としては用いていない。エレット・イスラエルに関しては、以下、参照。 *Encyclopaedia Judaica*, Second Edition (Keter Publishing House, 2007), vol. 6, p. 478.

「シオニズム」の概念に含有されることはなく、この用語を後者の意味に限定して用いようとする試みがなされた⁷。これ以降も「シオニズム」という用語には、実際に帰還することを目的とした運動と、政治的活動によって帰還するユダヤ人の生活の向上を目指す運動といった二つの性質が含められてきた⁸。

1.2 ユダヤ人の同化と反ユダヤ主義

上述のように、シオニズム運動とは、必ずしもエレット・イスラエルに帰還することを目的とはしない。このことは、近代シオニズム運動の創始者として知られるテオドール・ヘルツル (Theodor Herzl, 1860-1904) にも当てはまる。ヘルツルは、ブダペスト出身の戯曲作家、ジャーナリストであり、その地の社会に同化したユダヤ人であった。そして 1894 年、フランスで生じたドレフュス事件を目の当たりにすることで、反ユダヤ主義を認識するようになり、政治的に解決を見出すことに向かう。彼は、1896 年に出版した『ユダヤ人国家』の中でこう述べる。

反ユダヤ主義のなかには、粗野な冗談、他人の地位や収入への下劣な嫉妬、親たちから受け継いだ偏見、宗教的非寛容が存在していること——しかしまた、そのなかには誤って自己防衛と信じ込まれているものも認めうると信ずる。私はユダヤ人問題を、たとえそういった色彩やそういった色合いを帯びてはいるにしても、社会的な問題とも、宗教上の問題とも考えない。それは国家的な問題であり、それを解決するためには、我々はそれを何よりもまず、文化的諸民族の協議によってきちんと整理されるような政治的な世界問題としなければならないのである⁹。

ユダヤ人を民族として捉え、ユダヤ人問題の解決を試みるヘルツルにとっては、イギリスのジョゼフ・チェンバレン植民地相の「ウガンダ案」を受け入れたことに見られるように、ユダヤ人にとって安全な地を確保するためには、パレスチナにこだわっていたわけではなかった。しかしヘルツルの死後、1905 年に開催されたシオニスト会議において、「ウガンダ案」は最終的に却下された。これ以降、ユダヤ人のための安全な場所の候補地は、パレスチナに絞られることになる。ヘルツルが主唱した外交的にユダヤ人問題の解決を目指すシオニズムは、「政治的シオニズム」ないし「外交的シオニズム」と呼ばれる。

⁷ 当初、テオドール・ヘルツルは、「シオニズム」の用語の中に小規模な入植活動であるヒバット・ツィオンを含めて解釈しようとしたが、ヒルシュ・ヒルドゥスハイマー (R. Hirsch Hildesheimer) とウィリー・バムブス (Willy Bambus) の反対を受け、シオニズムは外交交渉を中心とした政治色に染められることになった。 *Encyclopaedia Judaica, Second Edition*, (Keter Publishing House, 2007), vol. 21, p. 540.

⁸ 例えばシオニズムにはこの二つの性質が含まれていることから、第八回シオニスト会議 (1907 年) ではハイム・ヴァイツマン (Chaim Weizmann) が、総合的シオニズム (Synthetic Zionism) という新語を生み出している。

⁹ 佐藤訳を引用した。テオドール・ヘルツル (著) 佐藤康彦 (訳) 『ユダヤ人国家——ユダヤ人問題の現代的解決の試み』 (法政大学出版局、1991)、9 頁。

1.3 シオニズムの類型・諸傾向

先に触れた「政治的シオニズム」(外交的シオニズム)のように、シオニズムはその特徴・傾向を類型化して論じられる場合が多く、またしばしばその類型化に基づいて理解される。政治的シオニズム(外交的シオニズム)、社会主義シオニズムとその流れをくむ労働シオニズム、また文化的シオニズムや、近年、その内実が大きく変容している宗教シオニズムなどに類型化される。歴史的に見ると、これよりさらに細かい分類が可能であるが、ここでは煩雑さを避けるため、大別して以上の類型のみを挙げておく。しかし、文化的シオニズムに関しては、ソルドのシオニズム観の特徴を明らかにするために、本稿第4章と第5章において検討する。

ヘルツルによって主導されたシオニズムとは、政治的シオニズムあるいは外交的シオニズムと呼ばれる。それは、自らがパレスチナの地に帰還することを目的とはせず、諸外国との交渉によってユダヤ人のための国家建設を目指すものを指す。それに対し、パレスチナに自ら赴き、自らの手でパレスチナを開拓するという目的を掲げる人々は「実践的シオニスト」と呼ばれた。実践的シオニズムの中にも、大別して二つの潮流が存在した。一つは、アハロン・ダヴィッド・ゴルドン(Aaron David Gordon, 1856-1922)に代表される「労働シオニズム」、もう一つは、ベングリオンに代表される「社会主義シオニズム」である。理念的には、労働シオニズムと社会主義シオニズムは社会主義を信奉しているか否かで区別された。1904年7月、ヘルツルが亡くなったのを機に、シオニズム運動内での主流派は外交を手段として建国を目指したヘルツルの政治的シオニズムから、ベングリオンが率いる社会主義シオニズムへと移行していった¹⁰。

ベングリオンは、1920年に、労働シオニズムの傘下にあるヒスタドルート(Histadrut)を結成し、イギリスによる委任統治下のパレスチナにいたユダヤ人の地位向上を目指した。さらに1930年には、この二つの潮流は合同し、マパイ労働党(のちにイスラエルが建国された際、与党になる)を組織することになる。

1.4 地域ごとの特徴

シオニズム史家アーサー・ハーツバーグ(Arthur Herzberg)はアメリカのシオニズムを「イデオロギーではなく感情(emotion)である」と定義した¹¹。一方、M・レイダー(M. Raider)はこのことに反論する¹²。レイダーによると、ハーツバーグの定義はあまりにも簡略化しすぎているという。アメリカのユダヤ人は単に感情に基づいてシオニズム運動を展開したのではなく、シオニズムに対して決して一枚岩でなかった、とハーツバーグの見解を批判している。

実際に初期のアメリカ・シオニズムは小規模なものであり、「シオニスト団体」としての存在は希薄であった。そのためアメリカのシオニズムの草創期を定義しようとする際、どこまでを「アメリカ・シオニズム」の範疇に含めるのかということが問題となる。なぜならアメリカ・

¹⁰ 臼杵陽『イスラエル』(岩波書店、2009年)、30-58頁。このような用語の使用法に関しては、レイダーに従った。Mark A. Raider, *The Emergence of American Zionism* (New York University Press, 1998), pp. 3-4.

¹¹ Arthur Hertzberg, *The Jews in America: Four Centuries of an Uneasy Encounter* (Simon & Schuster, 1989), p. 228.

¹² レイダーは、アメリカのユダヤ人とイスラエルの関係、アメリカのシオニズムと労働シオニズムの関係を歴史的に研究している。Raider, *The Emergence of American Zionism*, p. 3.

シオニズムの芽生えを認識する場合、何をもって彼らをシオニストとして定義するか、という問いが生じるからである。

さて、ロシアのシオニズムの特徴は大別して、パレスチナに移住する型とロシアに留まる残留型に分類できる¹³。他方、アメリカ・シオニズムはアメリカの地において、パレスチナに移住したユダヤ人を支援することがその特徴であり、移住型ではなくアメリカ社会に留まり、シオニズム活動を行なう残留型であると言える¹⁴。非移住型でありながら、パレスチナのユダヤ人を支援する姿勢は、ハダッサにも当てはまる。例えば、ハダッサの設立者の一人であるヘンリエッタ・ソルドは、アメリカ・ユダヤ人¹⁵でエレッツ・イスラエル¹⁶に渡った数少ない一人であったにしても¹⁷（ソルドは1945年にエルサレムで亡くなったものの）、ここで指摘すべき点は、本人の希望としては生まれ育った地、アメリカに戻ることを最期まで望んでいたということである。つまり、ソルドにとってのホームランドは、エレッツ・イスラエルではなく、アメリカだったと言える。

1.5 本稿の主題と意義

本稿は、ヘンリエッタ・ソルドのシオニズム観の独自性とシオニズム観形成において影響を受けたであろう思想的背景を明らかにすることを目的としている¹⁸。彼女は1912年にハダッ

¹³ ロシア・シオニズムをパレスチナに移住するか否かの識別は、以下を参照。森まり子「民族自治から主権国家へ—帝国解体期のシオニズム運動における民族分離主義の変容、1881—1948」、臼杵陽（監修）『シオニズムの解剖—現代ユダヤ世界に置くディアスポラとイスラエルの相克』（人文書院、2011年）、74—97頁。森は、「移住・分離型」および「残留・共存型」として区分している。また、森の区分で言うところの「残留型」のシオニストに関して丹念に研究されたものとして以下の書物が挙げられる。ここでは具体的な比較には立ち入らないが、アメリカ・シオニズムの特徴を確認するうえで、ロシア・シオニズムの特徴を検討するため、以下の文献も参照した。鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力—ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（東京大学出版会、2012年）。

¹⁴ ロシア・シオニズムの特徴とアメリカ・シオニズムのおおよその特徴については、本稿巻末に収録してある、付録2を参照。簡略化した図を掲載している。当然ながら、実際はより複雑なものであるが、見取り図として掲載している。

¹⁵ 本稿で使用している「アメリカ・ユダヤ人」は、断りのない限り、“Jewish Americans”（ユダヤ系アメリカ人）ではなく、“American Jews”（アメリカ系ユダヤ人）を指す。しかし、アメリカにおけるユダヤ人のアイデンティティ理解の実態としては、“Jewish Americans”（ユダヤ系アメリカ人）と“American Jews”（アメリカ系ユダヤ人）との間で揺れ動くものであり、個人においても明確な線引きがあるわけではない。

¹⁶ エレッツ・イスラエルに関しては、本稿、註6参照。

¹⁷ ミハエル・ブラウンによると、アメリカからパレスチナに渡った代表的な指導者は、1969—74年にイスラエルの首相を務めた、ゴルダ・メイアと、改革派のラビであったユダ・マグネス、そしてヘンリエッタ・ソルドの三名であった。その他のアメリカ・シオニストの指導者は皆、シオニズム活動の本拠地をアメリカに据え、活動を展開したと言える。以上のようにブラウンは定義するが、厳密には、ゴルダ・メイアはロシア生まれで、後にアメリカに移住した者の一人だと言う点には触れていない。Michael Brown, “Henrietta Szold, Health, Education, and Welfare, American Style,” in *The Israeli-American Connection: Its Roots in the Yishuv, 1914-1945* (Wayne State University Press, 1996), p. 133.

¹⁸ 「ソルド」の表記に関して、“Szold”（「ソルド」）という発音は、ローズ・ツァイトリンによると、ドイツ語の“besoldeter”に由来すると考えられている。祖先の一人であると思われる人物で、初めてガリツィアの政権で職を得たユダヤ人として、ミッシェル・ソルドが考えられる。“z”という文字は、この先祖の一部がハンガリーに移住したとき、本来の発音を保つために「ソルド」のスペルに加え

サを創設し、1920年にパレスチナへ渡った後、ナチス政権下のユダヤ人の子どもたちを救うため「青年アリヤー運動」(Youth Aliyah)を指揮したことで知られている。彼女はイシューヴ(パレスチナのユダヤ人共同体)のユダヤ人の生活向上のために尽力したが、彼女自身は建国自体を目指していたわけではなかった¹⁹。この点で、ベングリオンが目指したシオニズムとは異なっていた。

今日、シオニズムをユダヤ教の立場から論ずるならば、いくつかの異なる応答が返ってくるだろう。正統派ないし超正統派らの視点によると、シオニズム(この場合、領土を所有するイスラエル国家を意味する)は全くユダヤ教に反するものとして理解される。他方、今日、領土拡張主義とメシア主義を独自に融合した「宗教シオニズム」が展開している²⁰。

これらの相反するシオニズムへの反応は、現況のイスラエル国家をめぐる活発な議論の中に現れている。

本研究における論点を先取りするならば、ソルドは「生活の指針」としてのユダヤ教を信奉していた。つまり、ユダヤ教の律法を重んじる「宗教的」な女性であった。しかし、ここで言及する「宗教的」という意味は、近代のユダヤ教の改革の後に形成された正統派の立場からの見解ではない。本稿が問題として取り扱う、ソルドのシオニズム観とユダヤ教に関する考察は、上述の文脈とは全く異なるものである。

本稿の主題である、ソルドという一人の人物のシオニズム観を考察することは、今日のイスラエルの政治状況をめぐる上述のような問題・議論に直接影響を与えるものとは言えない。むしろ、本稿の意義は次の点にある。つまり、19世紀末からイスラエル建国に至るアメリカ・ユダヤ人女性が置かれていた状況、および当時のユダヤ教の状態、シオニズム運動の展開の一端を垣間見ることである。

ソルドの中で、ユダヤ教とシオニズムがどのように融合し、そのシオニズム観が形成されたのか、ユダヤ教とシオニズムがいかなる関係であったかについて考察することは、当時のユダヤ教世界やシオニズムが多様であり、主流の型の中だけに収まりきることのできない、有機的な豊かさに富んだものであったという現実を理解するうえで有効であると考えられる。

られたという。See, Edward Wagenknecht, *Daughters of the Covenant Portraits of Six Jewish Women* (the University of Massachusetts Press, 1983), p. 184. 『マクミラン版 世界女性人名大辞典』によると、彼女の姓は「ゾールド」と表記されている。ジュニファー・アグロウ(編)『マクミラン版 世界女性人名大辞典』、国書刊行会、2005年、238頁。けれども、ヘブライ語で記されたヘンリエッタ・ソルド自身のサイン、およびヘブライ語での刊行物には、「זולד」(sold)と表記されていることから本稿では「ソルド」として表記する。もしヘブライ語で「ゾールド」の発音を表すなら、「ז」(s)は「ז」(z)と書きかえられると考えるためである。

¹⁹ イシューヴ(Yishuv)はヘブライ語で、「居留地、集落、共同社会(“settlement”)」の意味。1948年にイスラエル国家が建設される以前の、パレスチナのユダヤ人共同体を指している。See, Erica B. Simmons, *Hadassah and the Zionist Project* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006), p. 207.

²⁰ 本稿で詳しく掘り下げることはできないが、「宗教シオニズム」に関しては以下を参照した。今野泰三「宗教シオニズムの越境——ヨルダン川西岸地区の『混住入植地』を事例として——」『越境研究』No. 5 (2015), pp. 57-98.

1.6 方法論

ソルドのシオニズム観の独自性を分析する際の方法論であるが、いくつかの問題点を指摘することができる。第一に、資料の欠如という問題が立ちはだかっている。詳細は後述するが、ソルドは自身のシオニズム思想に関して体系的に論じた著作を残していない。そのため、ソルドの生涯を時系列に概観しつつ、断片的にシオニズムに関して言及しているパンフレット、手紙、スピーチなどを手がかりに分析するという方法を採用。体系だった著作がないという点では、ソルドの友人であったユダ・マグネスについても該当する。マグネスについて博士論文をまとめ、出版した、ダニエル・P・コチン (Daniel P. Kotzin) の研究は、マグネスのシオニズム思想・活動に光を当てた本格的なマグネスの伝記である。(Daniel P. Kotzin, *Judah L. Magnes: An American Jewish Nonconformist* (Syracuse University Press, 2010.)) これまで、マグネスの研究は断片的であり、またマグネスの偉業を語るだけのようなものも多く、そのシオニズム思想を包括的に論じた研究は見られなかった。そういう意味ではコチンの研究は一次資料を網羅しつつ、マグネスのシオニズム理念をマグネスの生涯を通して描き出した先駆的な試みである。本稿は資料的な制約を認識しながらも、ソルドのシオニズム観の分析を試みるうえで、コチンのマグネスの伝記的研究の手法を参考に行っている。もっとも本稿は、ソルドの伝記というには不十分であると言わざるを得ない。なぜならソルドの伝記というならば、あまりにもソルドのシオニズム観とユダヤ教の関係にのみ、焦点を当てることになるためである。

本稿では焦点をより明確にし、煩雑さを避けるために、ソルドの経歴に関してシオニズム観を考察するうえで不要と思われたものについては意図的に取り上げなかった。ソルドの先行研究の状況に関しては後述するが、論点を先取りするならば、ソルドの研究に関しても、コチンのマグネスの研究のような新たな発展を試みる研究が必要であるように思われる。

本稿は、ソルドのシオニズム観を考察するものとして、広い意味で、ユダヤ学の領域に位置付けられる。だがユダヤ学といっても、その定義には曖昧なところがある。より詳細に言うならば、本研究はアメリカ・ユダヤ人女性史および、シオニズムの歴史、さらにシオニズムの思想研究といった領域を横断することになる。

本稿では扱うことができないが、本研究はのちに、ユダヤ学と他分野との学際的な研究が必要であること、アメリカ史一般におけるアメリカの女性史、あるいは、移民史の中にどう位置づけられるか、という問いへと発展させることが可能であること、また大きな課題として残っていることを先に述べておきたい²¹。

²¹ 日本において、アメリカ史・アメリカ研究の視点から、アメリカ・ユダヤ人のマイノリティの歴史研究を牽引してきた北美幸は、自身の研究方法とユダヤ学と呼ばれるものとの違いを次のように述べている。「とはいえ、筆者〔北〕がアメリカ史・アメリカ研究の視角からユダヤ人の問題を扱ったことは、マイナス面ばかりではないだろう。というのも、合衆国では、ユダヤ系に関する歴史研究は盛んに行われているが、その大部分は、自らがユダヤ系である研究者によって『自分史・同胞史』として描かれている。」北美幸『半開きの<黄金の扉>アメリカ・ユダヤ人と高等教育』(法政大学出版社、2009年)、293-294頁。筆者もまたユダヤの出自を持たないが、ユダヤ学の視点から、ユダヤ人自身がシオニズムをどのように理解しているのかについて本稿で扱っている。ユダヤ人の主観的なシオニズム理解を学ぶことの重要性はすでに序の「問題の所在」において触れた通りである。本稿ではソルドという一人の人物に焦点を当て、ユダヤ人によるシオニズム理解の一側面を考察することにあるが、ユダヤ学による考察だけでなく、アメリカ社会の中で、言い換えると、アメ

2. 先行研究

以下、本稿の主題に直接的に関わるものが、アメリカ・シオニズム、ハダッサ、ソルド研究においてどのように取り扱われているのかを瞥見したい。

2.1 アメリカ・シオニズムに関する研究

ハダッサはアメリカ・シオニズム界において最大の会員数を誇る団体であった。それにもかかわらず、アメリカ・シオニズムの歴史を扱った著作の中で、ハダッサ、あるいはソルドに関して言及した箇所は、数行、あるいは数パラグラフのみの紹介に留まっている点を指摘したい。それは、アメリカ・シオニズム運動の展開を国際政治史などの文脈で論じる場合、イスラエル建国過程において主導権を握ったわけではなく、そのため非政治的とされるハダッサについてアメリカ・シオニズム研究での記述はどうしてもわずかになる点はやむを得ないだろう。

例えば、ベン・ハルペルン (Ben Halpern) の *A Clash of Heroes* (1987年) の中では、ハダッサがアメリカ・シオニズムの中で主要な勢力となり、独自の表現において最も成功した例であると評価しつつも²²、別の箇所では、「ハダッサの成功の要因はブランダイスの支援があったこと」だったという条件を付している²³。確かに、第一次世界大戦勃発に伴い、アメリカで「シオニストの一般的事務を行なう臨時執行委員会」(The Provisional Executive Committee for General Zionist Affairs) が開催され、その議長となったルイス・D・ブランダイス (Louis D. Brandeis, 1856-1941) の指揮の下、ソルドが臨時執行委員の内の一人に含められていた経緯があり、ブランダイスの提案もあり、ハダッサは医療事業に特化していくわけではあるが。他方、ハダッサ独自の功績とするかどうかは、先行研究者の中でも評価が分かれている。シオニズム運動の概説書を記したウォルター・ラカー (Walter Laqueur) は、『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』において、「アメリカ・シオニズムを第一次世界大戦後の姿に変えたのは、ブランダイスひとりの力によるものではなかった」と述べ²⁴、最大会員数を誇ったハダッサを肯定的に評価している。

しかしながら、ラカーの上述の文献はシオニズム運動全体を網羅するものであるため、必然的にハダッサへの記述は極めて限定的であり、且つ深い考察はなされていない。

ナオミ・コヘン (Naomi Cohen) が *American Jews and Zionist Idea* (1975年) の中で、断片的にハダッサに関して記述しているが、ハダッサを「健康事業」(health projects) に携わった団体であると紹介している²⁵。

リカ史・アメリカ研究の視点からシオニズム運動を理解することも重要であることを指摘しておきたい。とりわけ、アメリカにおけるクリスチャン・シオニズムの歴史との関連でユダヤ人によるシオニズム理解を考察することは、アメリカ・ユダヤ人のシオニズム理解をより立体的に理解するのに役立つものと考えられる。

²² Ben Halpern, *A Clash of Heroes: Brandeis, Weizmann, and American Zionism* (Oxford University Press, 1987), p. 94.

²³ Halpern, *A Clash of Heroes*, p. 256.

²⁴ Walter Laqueur, *A History of Zionism* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1972). (ウォルター・ラカー (高坂誠訳) 『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』(第三書館、1987年)、235頁。引用は翻訳書から。

²⁵ Naomi W. Cohen, *American Jews and Zionist Idea* (Ktav Publishing, 1975), p. 7.

ハダッサの活動がパレスチナでの医療、公共福祉活動の促進に特化したものである、という評価は、ハダッサを特殊化することにも通じる。アメリカ・シオニスト指導者の一人である、ルイス・リップスキー (Louis Lipsky, 1876-1963) が女性団体は外交交渉等の政治的活動には向いていない、とする見解も、ハダッサを「特殊化」することと表裏一体の関係にあると言える。もちろんハダッサが戦略的にアメリカ・シオニズム内で、医療および社会福祉活動の分野を選択していった結果、ハダッサが一分野に特化したシオニズム団体であったと評価することは可能である。

けれども本稿で後述する AJR 委員会 (the Committee for the Study of Arab-Jewish Relations、以下、AJR 委員会) の活動は、医療／社会福祉活動の分野というよりは、政治的分野に関係する活動であったと言える。つまり、アメリカ・シオニズム内で特異な存在、特定の一分野に特化しているうえでは、ハダッサは、アメリカ・シオニズムの主流派にとって問題にはならなかった。

これに対し、アメリカ・シオニズム界の中核で舵を取ることは、ハダッサがアメリカ・シオニズム界で最大の会員数を誇りながらも、困難—あるいは不可能であったことを第三章においてみていく。具体的には、ハダッサがアメリカ・シオニズム内で影響力を及ぼした事例を取りあげ、またその影響力は極めて限定的なものであり、限界があった点を提示する。

アメリカ・シオニズムを論じる場合、ハダッサやソルドに関する言及が限定的になる傾向は、日本においても例外ではない。まず、日本におけるアメリカ・シオニズムに関する本格的な研究は、奈良本英佑や池田有日子の研究を第一に挙げることができる²⁶。その他では、アメリカ・シオニズムに関するわが国での本格的な研究はこれまでのところなされていない。2010年に法政大学に提出した池田の博士論文は、ミシェル・フーコーの「系譜学」を応用し、アメリカ・シオニズムがパレスチナ問題形成に至るアジェンダを決定づける権力過程にいかに関わったのかという点に焦点を絞り論じている。また同研究は、ルイス・ブランダイスのシオニズム活動に関する本格的な研究としても評価することができる。しかし、議論の焦点が国際政治史を中心に展開されるため、ハダッサおよびソルドにも触れられているが、ソルドに割くページ数は限定的である。

これに対し、本研究はアメリカ・シオニズムの全容ないし、国際政治の文脈からの考察は極めて乏しいものであるが、ソルドという一人の人物に焦点を当てることで、イスラエル建国以前のアメリカ・シオニズムの一側面を描写するという点に特徴があり、ソルドや「ハダッサ」に関する研究としては日本ではこれまでのところ蓄積のない先駆的な分野を扱ったものである。

2.2 「ハダッサ」に関する研究

歴史的には、ハダッサはアメリカ・シオニズムの中で、アメリカの当時の先端の医療技術や

²⁶ 奈良本英佑、“Preparation for the Biltmore Conference,”『法政大学多摩論集』第10巻、1994年、59—88頁；池田有日子『19世紀末から1948年イスラエル建国に至るアメリカ・シオニスト運動の展開—「アメリカ」と「パレスチナ問題」形成序説—』（博士論文、法政大学大学院政治学研究科、2010年3月24日）。

物資をパレスチナへ供給する活動を担い²⁷、パレスチナの公衆衛生の発展に貢献している。また、1880年代からアメリカへ移住して来た東欧系の女性の会員獲得に成功したハダッサは、後述するように、アメリカでは不人気だったシオニスト会員の増加に貢献した。ところが、ハダッサは現存するアメリカ・女性シオニスト団体でありながら、その歴史的な背景に関してはごく限られた範囲でしか知られていない。ハダッサの活動が歴史的にほとんど知られていない要因は、当時のアメリカ・シオニズムの指導者内には女性は政治的活動には不向きであると判断する者（代表的には、リップスキー²⁸）が依然として存在していたこともあると考えられる。ハダッサがアメリカ・シオニズム界で一定の役割を果たしながらも、必ずしも肯定的に受け止められていたわけではなかったのである。

ハダッサに関する研究は、これまでアメリカ・シオニズムを一般に扱った研究の中で主体的に取りあげられることはなかった。原因の一つとして次の点が考えられる。すなわちアメリカ・シオニズム一般を論じた概説は、政治的な観点から同時代のシオニズムの諸潮流との関係の中で取り扱おうとするために、アメリカ・シオニズム内の多様性にまで言及することはごく限られてしまう²⁹。そのためハダッサはこれまでアメリカ・シオニズムの傍流に位置付けられてきた。

しかし1990年代後半以降、現在に至るまでハダッサに関する研究に光が当てられるようになる。それらはアメリカ・シオニズムの歴史を概観する研究領域というよりは、広義において女性学（Women Studies）、あるいはジェンダーの領域を扱った分野、歴史社会学的な観点からの取り組みである。具体的には、イスラエルのヘブライ大学とアメリカのブランダイス大学の諸研究所において開催された二つの異なる学術会議が契機となり³⁰、イスラエル建国以前のユダヤ人共同体における北米を中心としたユダヤ人女性の活動に焦点が当てられることになった。ユダヤ人女性の活動が注目される一環として、ハダッサの活動にも光が当てられ、研究が

²⁷ 本稿における「パレスチナ」とは、イスラエル建国以前のパレスチナ地方一帯を指している。その範囲に関して明確な合意はないものの、オスマン帝国の支配下から1917年のバルフォア宣言以降、英国が委任統治を開始した地域一帯のことである。またヘブライ語で「イスラエルの地」を意味するエレット・イスラエルもパレスチナと同一のものを指している。伝統的にユダヤの文脈において、パレスチナ地方一帯を示す語として、エレット・イスラエルという呼称が用いられてきた背景から、本稿においても文脈に応じ、適宜使い分けている。

²⁸ リップスキーは、1912～1921年にかけて、FAZ（1917年にThe Zionist Organization of America, ZOAと改名）の執行委員会の議長を務めた人物である。1945年には、後にイスラエル国家の初代大統領となるハイム・ヴァイツマンらと共に、第二次世界大戦からの生存者に関する問題を協議する等、アメリカ・シオニズム界を引率した一人であった。

Louis Lipsky, *A Gallery of Zionist Profiles* (New York: Farrar, Straus and Cudahy, 1956): 137-143.

²⁹ Yonathan Shapiro, *Leadership of the American Zionist Organization 1897-1930* (University of Illinois Press, 1971); Ben Halpern, "The Americanization of Zionism, 1880-1930," *American Jewish History*, vol. 69, (Sep. 1979), pp. 15-33.

³⁰ 一つは、1998年にヘブライ大学で開催されたもので、イスラエル建国以前のユダヤ人共同体（ヘブライ語の呼称ではイッシューヴ、ישוב）および建国後のイスラエルにおける女性史を特集したもので、それは、当時イスラエルの学術界において初の試みであった。また翌年（1999年）には、「シオニズムおよびイッシューヴに対するアメリカ・ユダヤ人女性の役割」という主題の下、ブランダイス大学でシンポジウムが開催されている。後者の成果の一部として、以下の文献が出版されており、二つの学術会議開催の詳細については同文献を参照。Shulamit Reinhartz and Mark A. Raider eds. *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandeis University Press, 2005).

見直され始めている。

ハダッサに関して初めて歴史的、体系的にまとめた研究として、エリカ・シモンズ (Erica B. Simmons) の著書がある (Erica B. Simmons, *Hadassah and the Zionist Project* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006))。シモンズはこの著書の中で、ソルドのシオニズム観がアメリカの革新主義 (Progressivism) に基づいたものであり、この概念を広くシオニズム活動に取り入れたのはソルドであると指摘している³¹。この見解は、アロン・ガル (Allon Gal) やミハエル・ブラウン (Michael Brown) の研究の中にも確認できる。シモンズらが定義するように、ハダッサの活動のみに限定すれば、ソルドのシオニズムは上述の革新主義に基づくものであった。しかし、1912年に設立されたハダッサは、もとは「ハダッサ学習会」として出発していたのであり、さらにソルドがパレスチナでの実践的な活動に視野を広げた時期は、1909年に初めてパレスチナを訪問してからのことであり、シモンズの見解だけではソルドのシオニズム観は説明できないことになる。

ハダッサが1910、20年代を通して行なった看護師を派遣するというアイディアは、アメリカの革新主義時代に生じたジェーン・アダムス (Jane Addams) のセツルメントやリリアン・ウォルド (Lillian Wald) の訪問看護サービスに倣ったものであると考えられている³²。ウォルドがイーストサイドで展開したヘンリー・ストリート・ハウスの活動が、無料もしくは比較的 low cost で診察を行ない、宗教や人種を問わず近隣住民の求めに応じて訪問看護サービスを展開したことに倣い³³、ハダッサはパレスチナの地で宗教や人種を問わない精神を掲げ、ユダヤ人に限らずアラブ人にも医療を施した、というのがハダッサの主な紹介内容である。確かにハダッサは今日に至るまで形を変えながら、医療活動を通して設立当初の博愛主義的な精神を保持していると言える。

その他、メアリー・マキューン (Mary McCune) が指摘しているように、それが、ハダッサの意図しているものではないにせよ、同団体が医療活動やパレスチナでの公衆衛生を整備する活動を通して、実質的には後に「国家」となる基盤を形成するのに貢献した、と見なす研究も存在する³⁴。

1990年代後半以降、ハダッサを主題とした研究が出版されるなか、その主たる研究分野は社会学やユダヤ人女性史が中心であり、イスラエル建国以降のハダッサに関しては、政治的活動を分析する研究も見られるが、イスラエル建国以前のものに関しては、ハダッサの活動の記録

³¹ Simmons, *Hadassah and the Zionist Project*, p. 6, 25. 革新主義 (Progressivism) は、1900年代～1910年代に広まった改革の潮流を指すもので、産業化や都市化により、個人の機会の平等といったアメリカが本来理想とする理念が崩壊してきたという認識に基づいた運動。池田有日子「ルイス・ブランダイスにみる『国民国家』・『民主主義』、『パレスチナ問題』、『年報政治学』(排除と包摂の政治学—越境、アイデンティティ、そして希望)、木鐸社、2007年(2)、201頁、注(1)参照。

³² Simmons, pp. 6, 11, 13-14, 16, 25; Michael Brown, “Henrietta Szold’s Progressive American Vision of the Yishuv,” in Allon Gal ed. *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews* (The Magnes Press, 1996), p. 72.

³³ ウォルドの活動に関しては以下を参照。リリアン・ウォルド (著)、阿部里美 (訳) 『ヘンリー・ストリートの家』(日本看護協会出版会、2004年)。

³⁴ Mary McCune, “Social Workers in the Muskel Judentum: ‘Hadassah Ladies,’ ‘Manly Men’ and the Significance of Gender in the American Zionist Movement, 1912-1928,” *American Jewish History*, vol. 86, no. 2 (1998), pp. 135-165.

という側面が強調されている。この傾向に対し、ハダッサの掲げたシオニズム理念を主たる研究対象とするものは限られている。ハダッサ内部のアラブ人に対する見方およびその変遷を取りあげたもの、とりわけ AJR 委員会に関して取り上げているものは数少ない。例をあげると、アメリカ・シオニズムのアラブ人に対する取り組みを扱ったラファエル・メドッフ (Rafael Medoff) の研究³⁵や、ゾハル・セゲブ (Zohar Segev) の研究³⁶がある。セゲブはジェンダーの視点から、ベングリオンとハダッサの指導者の一人、ローズ・ジェイコブス (Rose Jacobs, 1888–1975) に焦点を当て、ハダッサが慈善事業的な性格からベングリオン主導のシオニズムの見解に接近していった 1940 年代の変化を取り上げ、ハダッサ内部においてソルドら従来のハダッサの見解が消滅していく過程を分析している。その他、ソルドの伝記を執筆した一人でもあるジョアン・ダッシュ (Joan Dash) がわずかに言及しているのみである³⁷。

上述のシモンズの著作が出版されたのち、ハダッサに特化した本格的な研究は、ミラ・カッツバーグ・ユングマン (Mira Katzburg-Yungman) の研究³⁸が挙げられる。同研究は歴史社会学的に、イスラエル建国以前から 1950 年代後半までのハダッサの活動を網羅したものである。また近年の研究としては、シャーリ・ブラウトバー (Shirli Brautbar) の著作が挙げられる³⁹。同著作は、第二次世界大戦以後のアメリカの消費社会のシンボルともいえるファッションとユダヤ人女性のアイデンティティ形成との関係を扱った点で独創的である。また、第二次世界大戦以後、アメリカにおいてハダッサが政治的な団体へと発展し、いかにユダヤ人女性たちのアイデンティティ形成に役立ってきたかに関して分析を行なっている。本研究との関連では、冒頭部のイスラエル建国以前のハダッサが理解していたアラブ人観に関する議論が重要である。しかし、カッツバーグ・ユングマンの研究もブラウトバーの著作も扱っている範囲が広いいためか、ソルド自身のシオニズム観に関しては表面的に触れるだけに留まっている。

³⁵ Rafael Medoff, “The Rise and Fall of Hadassah’s Committee on Arab-Jewish Relations,” in *Zionism and the Arabs: An American Jewish Dilemma, 1898-1948* (Praeger, 1997), Chap. 7, pp. 95-111.

³⁶ Zohar Segev, “From Philanthropy to Shaping a State: Hadassah and Ben-Gurion, 1937-1947,” in *Israel Studies*, volume 18 number 3, Indiana University Press (Fall, 2013), pp. 133-157; 以下の文献においても、ハダッサが政治活動に参入した背景、および、ベングリオンのシオニズム政策とハダッサのシオニズム理念の相違に関して部分的に扱われている。Mira Katzburg-Yungman, *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel* (The Littman Library of Jewish Civilization, 2012), pp. 36-42, 125-132.

³⁷ ダッシュは AJR 委員会に関して言及してはいないが、ハダッサがソルドの見解に反して、ベングリオンの案を受け入れたこと。またハダッサが、イフードに賛同したソルドの姿勢を批判した経緯を簡単に扱っている。Joan Dash, “Doing Good in Palestine: Magnes and Henrietta Szold,” in eds. William M. Brinner and Moses Rischin, *Like All the Nations?: The Life and Legacy of Judah L. Magnes* (State University of New York Press, 1987), pp. 108-110; Dash, *Summoned to Jerusalem*, pp. 296-299.

³⁸ Mira Katzburg-Yungman. *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel*, Tammy Berkowitz (trans.) (The Littman Library of Jewish Civilization, 2012). (trans. From Hebrew)

原本となったヘブライ語版は以下。 *American Women Zionists: Hadassah and the Rebirth of Israel* (The Ben-Gurion Research Institute, 2008). [in Hebrew]

(מירה קצבורג-יונגמן, נשים ציוניות באמריקה, מכון בן-גוריון, 2008.)

³⁹ Shirli Brautbar, *From Fashion to Politics: Hadassah and Jewish American Women in the Post World War II Era* (Academic Studies Press, 2012).

2.3 ソルドに関する研究

ソルドに関する従来の研究では、マーヴィン・ローヴェンタール (Marvin Lowenthal) の *Henrietta Szold: Life and Letters*、ジョアン・ダッシュ (Joan Dash) の *Summoned to Jerusalem: The Life of Henrietta Szold* といったヘンリエッタ・ソルドの二冊の伝記⁴⁰を基にして展開されてきたと言って良いだろう。そのほか、青年アリヤーの活動を纏めたものや、ソルドの家族の書簡などがあるが、いずれもソルドの偉業を手短に纏めたものが中心であった⁴¹。

従来のソルドに関する伝記は、ソルドを偉人として纏める傾向が強かったことが指摘される。それに対し、バイラ・ラウンド・シャーゲル (Baila Round Shargel) の著作⁴²は、ソルドの偉人としての認識を批判的に提示したという点において、ソルドに関する研究を前進させたと言えるだろう。シャーゲルは、同著作において、ソルドの叶わぬロマンスの相手であったルイス・ギンツベルク (Louis Ginzberg, 1873-1953) との書簡を取りまとめ、新たな人間味のあるソルド像を提示した。

本研究との関連で重要であるソルドのシオニズム観の背景に関する先行研究は、次の2点のほかには今のところなされていない。一つは、アロン・ガル (Allon Gal) の論文、“The Zionist Vision of Henrietta Szold” (2005年) であり⁴³、もう一つはエリック・ゴールドシュタイン (Eric L. Goldstein) の論文、“The Practical as Spiritual: Henrietta Szold’s American Zionist Ideology, 1878-1920” (1995年) である⁴⁴。また、パレスチナに渡ってからのソルドのシオニズム観に関連するものについては、ミハエル・ブラウン (Michael Brown) の論文“Henrietta Szold’s Progressive American Vision of the Yishuv” (1996年) が挙げられる⁴⁵。

ガルは、ソルドのシオニズム観が彼女のユダヤ教理解に根ざすものであったと解釈し⁴⁶、ヨーロッパで発生したヘルツルのような政治的シオニズムとは徹底して区別する必要がある、と

⁴⁰ Marvin Lowenthal, *Henrietta Szold: Life and Letters* (Greenwood Press, 1975 [1942]); Joan Dash, *Summoned to Jerusalem: The Life of Henrietta Szold* (Wipf and Stock Publishers, 2003 [1979]).

⁴¹ Levin, Alexandra ed., *Henrietta Szold and Youth Aliyah: Family Letters, 1934-1944* (Herzl Press, 1986); Levin, Alexandra Lee. *The Szolds of Lombard Street: A Baltimore Family, 1859-1909* (The Jewish Publication Society, 1960).

⁴² Baila Round Shargel. *Lost Love: The Untold Story of Henrietta Szold, Unpublished Diary and Letters* (The Jewish Publication Society, 1997).

⁴³ Allon Gal, “The Zionist Vision of Henrietta Szold,” in: Shulamit Reinharz and Mark A. Raider eds., *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandeis University Press, 2005), pp. 25-43.

⁴⁴ Eric L. Goldstein, “The Practical as Spiritual: Henrietta Szold’s American Zionist Ideology, 1878-1920,” in *Daughter of Zion: Henrietta Szold and American Jewish Womanhood*, ed. Barry Kessler (Editor and Curator) (Jewish Historical Society of Maryland, 1995), pp. 17-33.

⁴⁵ Michael Brown, “Henrietta Szold’s Progressive American Vision of the Yishuv,” in *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews*, ed. Allon Gal (The Magnes Press, The Hebrew university, Wayne State University Press, 1996), pp. 60-80.

⁴⁶ アロン・ガルは現在、ベングリオン大学の名誉教授。アメリカのシオニズムに関する多数の著作、論文があり、英語およびヘブライ語で執筆している。ヘンリエッタ・ソルドを研究する主要な研究者の一人でもある。ベングリオン大学付属のセンター、The Center for the Study of North American Jewry and head of the English-speaking World Division の創設者。

述べる⁴⁷。しかしながら、ガルの論文の中では、ソルドのシオニズム理念とユダヤ教理解との関係についての考察にはそれほど紙面が割かれておらず、さらなる検討の余地があると思われる。この問題は資料的制約からこれ以上考察の余地がない事柄であるのかもしれない。しかし、断片的にソルド自身が語る、「ユダヤ教理解」に基づいてシオニズム活動を行なったという記述を無視することはできない。

3. 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。

第1章はまずソルドの生きた時代背景を瞥見し、とりわけ父親であるラビ・ベンジャミン・ソルドからの影響に着目しながら、ソルドの略歴を紹介した。また、ソルドのアメリカ・シオニズムとの関わりを概観した。第2章では、ソルドのシオニズム観の特徴を明らかにするために、ルイス・ブランダイスとの比較を試みる。続く第3章においては、ソルドが設立したハダッサに焦点を当てた。この章では、ハダッサがアメリカ・ユダヤ人女性の活躍の場として機能する一方で、ハダッサのアメリカ・シオニズム内での活動が限定的であったことを、AJR委員会 (the Committee for the Study of Arab-Jewish Relations、以下、AJR委員会) を事例に論じた。また、シオニズムに従事するうえで、ソルドと他のハダッサ指導者との関心の相違が徐々に明らかになっていく様子を取り上げた。第4章では、第3章で取り上げたAJR委員会の事例を参照しながら、ソルドとマグネスのシオニズム観の源泉を明らかにすることを試みた。終章に相当する第5章では、ソルドのシオニズム観とユダヤ教の関係性を知るうえで重要と思われる小論文とスピーチ原稿を取り上げた。さらに本稿全体との関わりをのなかでソルドのシオニズム観の主張を整理し、ソルドのシオニズム理念の位置づけを行なった。

以下、第2章から第5章の概要を小括する。

第2章 (小括)

第一次世界大戦下において、ソルドはブランダイスの指揮のもとパレスチナへ緊急の医療物資を輸送し、医師・看護師を派遣するなど活動を共にしたが、二人のシオニズム観の相違はソルドがパレスチナに渡って以降、より顕著になっていった⁴⁸。それは本稿で見てきたように、とりわけパレスチナ観またアラブ人に対する認識の差異であった。その最大の要因はソルドがシオニズムにユダヤ教の理想を見出していたのに対し、ブランダイスはあくまでもアメリカの民主主義の精神に基づくシオニズムを展開しようとしたところにあると言えるのではないだろうか。ブランダイスはアメリカの民主主義に基づくものという理解のもと、パレスチナにいる

⁴⁷ ちなみにガルは、ヨーロッパで発生した政治的シオニズムを、長い捕囚 (galut) の状態で発展してきた伝統的なユダヤ教とユダヤの価値に対する反乱とみなし、また政治的シオニズムはその反乱を普及させようとしたものであると定義している。Gal, "The Zionist Vision of Henrietta Szold," pp. 25-26.

⁴⁸ Brown, "Henrietta Szold's Progressive American Vision of the Yishuv," p. 156 ff.

アラブ人の存在を認識しながらも、ユダヤ人の優位性を主張した⁴⁹。他方、ソルドは結果的に自分の抱いたシオニズム観の実現が失敗に至るかもしれないと認識していたが、それでもシオニズムはユダヤとアラブの共生をもたらすものとして信じていたことが、先に引用した彼女の言葉からも伺うことができる。このように、パレスチナ観を通してみると、ブランドイス派に属していたソルドとブランドイスとでは、そもそもシオニズム理解のベクトルが異なっていたことがわかる。共に革新主義時代にシオニズム運動を展開させた二人であるが、ブランドイスが革新主義の理念をシオニズムの根本に据えていたのに対し、ソルドは革新主義時代に起こり、その精神が反映された看護師派遣サービスというシステムをハダッサの活動に導入したにしても、彼女におけるシオニズムのその根本に革新主義の理念を据えていたわけではないことが明らかになった。

第3章（小括）

本章では、まず AJR 委員会とソルドとの比較を通して、ハダッサ内部にはアラブ人との関係をめぐり相反する見解が存在していたことを概観した。3-4 でみたように、1940年から1943年にかけての一時期とはいえ、当時の時代状況の変化を汲み取りながら、AJR 委員会を含むハダッサの見解は、ハダッサの顔として象徴的な人物であるソルドの見解とは袂を分かつものとなった。ユダヤ人を救うという点で、ソルドとハダッサ、また AJR 委員会は同じ目的を共有していたが、ソルドがユダヤ人とアラブ人との共存の形を引き続き描いていたのに対して、ハダッサはビルトモア綱領を支持する形で、そして AJR 委員会はコンセンサスを見出すことができずに自主解散へと至った形で、共生を目指すアジェンダより、ヨーロッパのユダヤ難民救済の解決が優先されることになった。

ソルドとハダッサ側の見解の相違は、ソルドが「ユダヤ教」に基づいたシオニズムを理想化していたのに対し、ハダッサや AJR 委員会の指導者はソルドの見解を共有していなかったことが一因であると言える。そのため、ハダッサ側は時代の趨勢に応じて立場を変容させていったと考えられる。

ハダッサとソルドにおける北米とパレスチナという活動拠点の違い、およびパレスチナでのアラブ人の反乱を直接目撃するか否かといった状況把握の認識の差は想像するよりもはるかに大きなものであったにちがいない。また、ECZA の AJR 委員会への介入に見られるように、ハダッサは常に男性中心的なアメリカ・シオニストの顔色をうかがう必要性のある状況下にさらされていた。

AJR 委員会の設立を通じたハダッサの一時的な活躍は、その政治性のなさ故に、他の男性中心のアメリカ・シオニストから、その存在が認められるものとなった、というアイロニーを含んだものであった。女性は「経験不足」であるが故に政治的な活動には不向きである、という

⁴⁹ ガルもハダッサがアメリカの民主主義と一体となり、エレット・イスラエル [パレスチナ] への寄付金およびエレット・イスラエルの開発という活動を通してシオニズム運動を展開したと位置づけている。Allon Gal, “Louis Brandeis and American Zionism,” in Allon Gal ed., *The Legal and Zionist Tradition of Louis D. Brandeis* (The Israel Academy of Sciences and Humanities, 2005, p. 82 [in Hebrew]). しかし、少なくともソルドおよびハダッサはユダヤ人の優位性を主張してはいない。

ベングリオンらが有していた見解⁵⁰、あるいは、ハダッサは「女性シオニスト団体」であり、それ故に「非政治的」な活動、すなわち医療や福祉活動に適している、といったイメージの中に、ハダッサの活動は収斂せざるを得なかったのではないか。

もちろん、彼女たちが医療や福祉事業に関心を抱いたことは事実であるが、しかし、AJR 委員会の例に見られるように、シオニズム運動内でイニシアチブをとることに関心がなかったというわけではない。ハダッサの AJR 委員会解散とビルトモア綱領支持によるアラブ人との共存を巡る理念の後退は、一見すると自己矛盾をきたすものである。その背景には、ハダッサが女性シオニスト団体であるということを拠り所とするゆえに、アメリカ・シオニスト界、およびシオニズム運動全体のなかで主導権を握るための十分な土壌が形成されていなかったことが考えられる。

ハダッサは、結局のところ、AJR 委員会設立から解散へと至る過程を通して、アメリカ・シオニスト界を中心に、自らのシオニズム理念を実行しようとした際に、ジェンダー的な制約があったために、自らの理念とその実践の狭間でジレンマを抱えていたのである。

第4章（小括）

第4章では、第3章で取り上げた AJR 委員会の事例を参照し、ソルドとマグネスのシオニズム観の背景について、「道義心」(Moral Code) というキーワードを取り上げ、シオニズムと道義心との関係をソルドとマグネスが残したスピーチや小論文から考察した。

マグネスとソルドは、すでに述べたように、1942年のビルトモア会議で欧州の「ユダヤ人問題」解決のために、ユダヤ・コモンウェルスの建設を承認した決議に抗議した。その理由は、マグネスとソルドが文化的シオニズムの流れを汲んだシオニズム理念を有していたためである。

彼らはアハッド・ハムから、精神的な支柱としてパレスチナの場所を必要とする点、およびユダヤ教を道徳的な実践の行ないとみなす点を受容し、シオニズム活動を展開した⁵¹。両者とも、理念的にはパレスチナをユダヤの精神的なセンターとして必要不可欠な存在であると主張するのと同時に、実践的な活動としてはパレスチナの地でユダヤ人とアラブ人の共生を、その生涯の最後まで目指した。

この矛盾とも捉えられかねない思想を、彼らはシオニズムの理念として育んだ。それは、彼らが目指した「バイナショナリズム」の語源自体が、1) 二つのネーションが想定されたうえで、それらのネーションの思想を指す、2) 二つの異なる民族が同じ土地での共生を目指す、といった両義的なものであることから明らかである。

異なるもの同士の「共生」を目指すとする場合、それは一体どのような水準での共生なのだろうか。イフードの綱領(1943年)をひもとくと、3-a)には、「二民族の政治的平等を基礎としたある統治形態をパレスチナに築くこと」と記載されている⁵²。しかしイフードの活動は、

⁵⁰ Segev, "From Philanthropy to Shaping a State," pp. 148-149; Medoff, *Zionism and the Arabs*, pp. 106-107.

⁵¹ マグネスとソルドは、ユダヤ教を現実の側面に適応させる柔軟性をシェヒターから吸収し、パレスチナでの礼拝に取り入れた。

⁵² Martin Buber, Judah L. Magnes and Moses Smilansky, *Palestine, a Bi-national State* (Ihud [Union] Association of Palestine, 1946), pp. 7, 29; ブーバー(著)、メンデス＝フロール(編)『ひとつの土地にふたつの民』、133-134頁。

アメリカ・ユダヤ人社会において、またパレスチナで主流派であったベングリオン主導の労働シオニズムを前にして、政治的な影響力は乏しかった。イフドの活動における政治的影響力の弱さに見られるように、マグネスとソルドの描いた「共生」という理念は、当時の他のシオニストからすると、理想主義的な「平和主義的シオニスト」として留まっていたに過ぎないという評価を下すこともできるだろう。

しかし、本章 4.5 でシオニズムと道義心との関係性に触れたように、晩年のマグネスとソルドは決して、彼らが描いたシオニズム理念を楽観的且つ肯定的に捉えていたわけではなく、それが果たして正しかったのかという疑念を抱いていたことを付け加えたい。また、マグネスとソルドのバイナショナリズムの限界点は、彼らがアメリカ社会に受け入れられたユダヤ人であったため、迫害にさらされるという経験を持たなかったことであり、その点が彼らのシオニズム理念の理想主義的な傾向を強めていたとも考えられる。少なくとも、彼らはパレスチナ在住の「アメリカ・ユダヤ人」として、バイナショナリズムを目指していたことに留意する必要がある⁵³。

本章では、主にマグネスとソルドを取りあげたが、様々な潮流があったシオニズム運動のなかでも、「文化的シオニズム」という括りでシオニズムを考える場合、その受容の多様性（マルティン・ブーパー、ハンナ・アーレント、エルンスト・シモン、ハンス・コーンなど）への考察は大きな課題として残っている。本稿の最終章である次章では、いかなる点でソルドが文化的シオニズムの思想と近似しているのかを考察する。それによって、ソルドのシオニズム観の独自性が浮き彫りになると考えられる。

当時のパレスチナ在住のユダヤ人とアラブ人の「共生」に関して、イフドに対して批判を行なうならば、アラブ人とユダヤ人という大きな相違にのみ関心が集中することで、個々のエスニックな背景（宗教的・文化的慣習の相違を含む）への眼差しが後退してしまっている点が問題として挙げられる。つまり単純にアラブ人とユダヤ人という二項対立的な構図を想定し、その中での共生を図れば平和を築くことができたとする単純な問題ではなかったということだ。当時のパレスチナの実態、少なくとも、旧イシューヴと新イシューヴにおけるユダヤ人間の多様性にも目を配る必要がある。しかしながら、このような問いはソルドのシオニズム観を考察するという本稿の目的とは異なるため、これ以上本稿で掘り下げることはできない。これらに関しては今後の課題としたい。少なくともソルドに関しては、ユダヤ人のあいだにおけるエスニックの相違から生じる問題にも関心があったことを指摘しておきたい⁵⁴。

⁵³ 「文化的シオニズム」を受容したシオニストも当然一枚岩ではなかった。例えば、上山安敏は、ブリット・シャロームの設立に尽力したショーレムを例に挙げて指摘している。「[ショーレムが]アーレントらに対してコスモポリタンの違和感を持ち、後のイフド（統合）には参加しなかったのはそうしたアメリカのディアスポラとエルサレムのシオニズムの分極化が背景にあると考えられる」。上山安敏「〈シンポジウム講演〉エグザイル（Exile）の知識社会学」、『京都ユダヤ思想』第2号、（京都ユダヤ思想学会、2012年）、101-102頁。

⁵⁴ Michael Brown, *The Israeli American Connection: Its Roots in the Yishuv, 1914-1915* (Wayne State University Press, 1996), pp. 134-135; Shirli Brautbar, *From Fashion to Politics: Hadassah and Jewish American Women in the Post World War II Era* (Academic Studies Press, 2012), pp. 24-26.

第5章（小括）

終章に相当する第5章では、ソルドのシオニズム観を知るうえで重要と思われる小論文とスピーチ原稿を取り上げ、ソルドのシオニズム観の主張とユダヤ教との関係を考察した。

これまで、ブランダイスとソルドは1920年代の革新主義の影響を受けて、シオニズム活動を展開したと位置づけられてきたが、ブランダイスとソルドのパレスチナ観を比較した結果、ブランダイスはアメリカニズムに基づいてシオニズム活動（パレスチナへの支援）を展開し、パレスチナでのアメリカの覇権を視野に入れていたことが明らかとなった。他方、ソルドはパレスチナへ救援物資や医師、看護師を派遣するといった、アメリカの最先端の技術や知識をパレスチナへ提供することを目的としていたが、パレスチナにおいてアメリカが一定の影響力を及ぼすことには関心がなかった。

ブランダイスは極めて世俗的な生活を送っていたが、ソルドとマグネスはユダヤ教の戒律を遵守しつつ、ユダヤ教の近代化にも積極的に対応していた。ソルドはハダッサを設立し、その中でシオニズム活動を展開したが、シオニズム活動の動機の部分に関しては、ハダッサの他の指導者よりもマグネスの方がより距離が近かったことを提示した。（本稿：第3,4章）

ソルドとマグネスがユダヤ教をどのように捉えていたのかを知るために、本稿では「moral, morality, moral code, morally」といったキーワードを手がかりにして、彼らのユダヤ教理解を明らかにすることを試みた。

マグネスはユダヤ教の実践の大切さを訴えた。マグネスの上述の文言を解釈すると、ユダヤ人がアイデンティティの危機に立った状況下でこそ、なおユダヤ教の実践が大切であると主張したものと考えられる。それは、1910年にアハッド・ハアムが述べた次の主張とも重なるものであった。（“Judaism and the Gospel”）（本稿：p. 110）

これに対し、ソルドは自身をシオニズムへと駆り立てた理由はユダヤ教（Judaism）であると記述している。ソルドの場合、「道義心（moral code）としてのユダヤ教を信じている」と述べている。（本稿：p.110）これらは、アハッド・ハアムの1910年の発言と極めて類似している。

同様に、マグネスもソルドも、ユダヤ的な生活を保持するためにパレスチナが重要な要素であることを述べており、このことはアハッド・ハアムの提唱した文化的シオニズム、すなわち、ユダヤ人にとっての精神的な中心地としてパレスチナの地が必要であるという見解と同じであると言える。

ソルドにとって、ユダヤ教の実践こそが、彼女のシオニズム活動の礎になっており、そのためソルドの中ではユダヤ教とシオニズム活動が矛盾するものではなかったことが明らかになった。

以上の考察から、ソルドもマグネスもアハッド・ハアムのユダヤ教理解を共有していたことが明らかとなった。しかしそれは単にアハッド・ハアムの文化的シオニズムの受容に留まるものではなく、本研究では、ソルドやマグネスがアメリカ版（型）文化的シオニズムを展開していった可能性を示唆した。しかし、「アメリカ版（型）文化的シオニズム」を考察するには

ソルドとマグネスだけにとどまらず、ソロモン・シェヒターやホレス・カレンなどのシオニズム観と比較検討する必要がある。本研究では、まずソルドのシオニズム観について焦点を当てたため、より広範な視点での「アメリカ版（型）文化的シオニズム」に関する考察は今後の課題の一つとしていきたい。

結論

最後に本稿全体の構成により明らかになった点を要約し、米国ユダヤ教の変遷過程から、ソルドについて一言触れることで結びにかえたい。

これまで、ブランダイスとソルドは 1920 年代の革新主義の影響を受けて、シオニズム活動を展開したと位置づけられてきたが、ブランダイスとソルドのパレスチナ観を比較した結果、ブランダイスはアメリカニズムに基づいてシオニズム活動（パレスチナへの支援）を展開し、パレスチナでのアメリカの覇権を視野に入れていたことが明らかとなった。

他方、ソルドはパレスチナへ救援物資や医師、看護師を派遣するといった、アメリカの最先端の技術や知識をパレスチナへ提供することを目的としていたが、パレスチナにおいてアメリカが影響力を及ぼすことには関心がなかった。

ブランダイスは極めて世俗的な生活を送っていたが、ソルドとマグネスはユダヤ教の戒律を遵守しつつ、ユダヤ教の近代化にも積極的に対応していたことを確認した。ソルドはハダッサを設立し、その中でシオニズム活動を展開したが、シオニズム活動の動機の部分に関しては、ハダッサの他の指導者よりもマグネスの方がより距離が近かったことを提示した。

ソルドは自身をシオニズムへと駆り立てた理由はユダヤ教（Judaism）であるとし、「道義心（moral code）としてのユダヤ教を信じている」と述べている。このユダヤ教と道義心を結びつける見解は、アハッド・ハムの 1910 年の“Judaism and the Gospel”に見られる発言と極めて類似している。またマグネスもソルドも、ユダヤ的な生活を保持するためにパレスチナが重要な要素であることを述べており、このことはアハッド・ハムが提唱した文化的シオニズム、すなわち、ユダヤ人にとっての精神的な中心地としてパレスチナの地が必要であるという見解と同じであると言える。

以上のことから、ソルドもマグネスもアハッド・ハムのユダヤ教理解を共有していたことが明らかとなった。しかしそれは単にアハッド・ハムの文化的シオニズムの受容に留まるものではなく、本研究ではソルドやマグネスが「アメリカ版（型）文化的シオニズム」を展開していった可能性を示唆した（本稿、4.5.1 参照）。

シオニズムの思想的背景を論じる際にしばしば議論の対象とされる争点は、シオニストが聖書のモチーフ、ユダヤのシンボルやユダヤの伝統を新たなアイデンティティ形成の拠り所とし、シオニズムを正当化する「神話」に基づくものである。ソルドのシオニズム活動および理念は、このようなシオニズムの「神話」をめぐる争点の中心に位置づけられていない。そのため、シオニズムを思想的に論じる文脈では、ソルドはこれまで十分に光が当てられることのなかった人物である。シオニズムの複雑な歴史をより深く理解するうえでも、ソルドのシオニズム観を分析した本研究の試みは一定の意義があると考えられる。

“A Century of Jewish Thought”（1896 年）のスピーチや、“The Internal Jewish Question”

(1901年)の論文に見られるソルドの「パレスチナ観」は、一見するとこれらの「神話」に類似している部分が確認される。これは文化的シオニズムが孕んでいる矛盾点とも一致する。しかし、ソルドはユダヤ教理解に関しては極めて独自の考え方を有していることを指摘した。

“The Internal Jewish Question” (1901年)で、ソルドは「タルムード主義」というキーワードを用い、時代状況に即して変革しないユダヤ教(この場合、「正統派」を指す)を批判し、ユダヤ教は時代状況に即して解釈していくべきだと説いた。これは父親の教え(「生活の指針としてのユダヤ教」)を引き継いだものと言えるだろう。ソルドが語るユダヤ教とは、「ユダヤ教≠シオニズム」、「シオニズムはトーラーの教えに反するもの」という正統派からのシオニズム批判とは別の「ユダヤ教」に基づくものであった。本稿第一章(1.3.2)で確認したように、ラビであったソルドの父親は当時の正統派でもなく、行き過ぎた改革を示す改革派でもなく、その間を揺れ動く立場を表明していた。ユダヤ教の実践に関してソルドは父親から影響を受けている。

米国において女性にラビの資格が与えられたのは1972年⁵⁵のことである。19世紀から20世紀に至る米国のユダヤ人女性の宗教的な生活について論じた、エレン・M・ウマンスキーは、ソルドを次のように評価する。ウマンスキーは保守派の改革運動がソルドの時代に女性にもラビの資格を与えることを認めていたならば、ソルドは「ハダッサを設立するというよりも、ラビになることで、彼女の精神的な遺産(spiritual gift)〔すなわち『ユダヤ的伝統』〕を体現していただろう」⁵⁶と解釈している。

ウマンスキーがこのように予測した背景には、ソルドが当時の女性としては珍しくユダヤ教の学問(伝統)に精通していたことが挙げられるだろう。それだけでなく本稿で取り上げたように、ソルドはシオニズム活動の中で「ユダヤ的伝統」を時代の変化に即する形に再解釈し、表現した。別の見方をすれば、保守派ユダヤ教が米国で盛んになる土壌を準備した先駆的な人物の一人であったとも言えるだろう。

⁵⁵ ドイツでは1935年、レジーナ・ジョナス(Regina Jonas)が世界で初めて女性にラビの資格が与えられた。米国では1972年にサリー・プリザンド(Sally Priesand)がラビの資格を得ている。

⁵⁶ Ellen M. Umansky, “Spiritual Expressions: Jewish Women’s Religious Lives in the United States in the Nineteenth and Twentieth Centuries,” in Judith R. Baskin, ed., *Jewish Women in Historical Perspective* (Wayne State University Press, 1999), p. 361, n. 30.